



“あの日”を語り継ぐ

公益財団法人広島市文化財団
広島市吉見園公民館

目次

タイトル	証言者	被爆時 年 齢	頁
今もなお忘れ得ぬ出来事 ～生かされている命を大切に～	黒瀬富恵	19	1
八幡村の8月6日 ～小学生が体験した戦争～	小松邑司	11	5
あの日の五日市町 ～爆心地から9 km 離れた町で～	H. T.	10	11
原爆に家族を奪われて ～戦後を生き抜いた姉妹の絆～	高橋美保子	7	17
私が忘れられないこと	空 一雄	15	23
私の8月6日 ～今もはっきり覚えている光景～	吉田宣子	7	27
運命の8月6日	藤本廣海	3	31
私の8月6日	平田利昭	7	33



“あの日”を語り継ぐ

今もなお忘れ得ぬ出来事 ～生かされている命を大切に～

くろせとみえ
黒瀬富恵さん（87）＝広島市佐伯区旭園

私は、当時、南蟹屋町（＝現在の南区）に両親と2歳年下の弟と暮らし、自宅からすぐ近くの農商省広島食糧事務所（＝爆心地から約3キロメートル）に勤務していました。

昭和20年（1945年）8月6日（月）の朝、警戒警報が解除になったので事務所に出勤し、事務室に通ずる通路を歩いて入り口の扉を開けようとした時です。突然、辺りがパーと光り、身体が熱くなったので、爆弾か何かは落ちたのではないかと思い、いつも訓練しているようにとっさにその場に伏せました。事務室にいた10人ぐらいの職員が逃げようとして一斉に出入口に殺到し倒れたので、入り口に一番近かった私はその人たちの下敷きになりました。上に覆いかぶさっていた人たちは飛んできたガラスの破片が何かでけがをしたのでしょう。その人たちの血が服についている程度で、私にはけがはありませんでした。事務室の中のものは飛び散り、建物のドアは倒れたりしていたと思うのですが、辺りの状況については、はっきり覚えていません。

皆はしばらく様子を窺いましたが、何も変化がないので、その後、防空壕に避難しました。私は母のことが心配になり、途中で皆から離れて自宅に戻りました。家に帰ってみると母は鼻血を出してぼうぜんとしており、家具も戸も窓ガラスも吹き飛び、とても住めるような状態ではありませんでした。

当時、何かあった場合は、府中町の国民学校に避難するように家族で申し合わせていましたので、宇品（＝現在の南区）の職場で被災した父と、坂村（＝現在の安芸郡坂町）で被災した弟と夕刻に再会した私たちは皆で救護所となったその国民学校に行き、おむすびなどの食べ物をもらいました。途中、原子爆弾で亡くなった人たちの遺体がずらりと並べられている光景や、ひどくやけどし赤く膨れ上がった人、皮膚がずらりとむけ痛々しく垂れ下がった人、ガラスの破片などでけがした人や、あちこちで遺体を荼毘に付す様子を目の当たりにしましたが、その時は、怖いとも何とも思わず、また、涙すら出ませんでした。それほど、原爆投下直後の人々の感情は麻痺していたのです。

二、三日はその救護所に通いましたが、けがややけどもなく比較的元気だった私たち家族は、住めなくなった家の再建を諦めて、一旦、父母の故郷の岡山県に帰ることになりました。その後、父母は岡山県に残り、私と弟は広島市に戻り、仕事に復帰しました。

私は、翌年の3月に職を辞し、帰郷。昭和22年に結婚し、再び広島に戻ってきました。結婚前後に歯茎から血が出るなどの敗血症を患い、脚に斑点ができたことはありますが、当時、それが原爆による後遺症であることにも気付かず、またその後、大病を患うことなく健康で今日に至っています。

しかし、私には8月6日の被爆体験の中で心の奥深くに刻まれ、あれから68年経った今もなお思い出す出来事があります。

当時は、学校や町内会と同様に勤務先からも建物疎開作業に出るようになっており、私は、ちょうど、あの8月6日に広島市役所北側の小町（＝現在の中区）の建物疎開作業に行く番になっていました。しかし、職場の同僚の1人から「6日に市役所に所用があるので作業の番を代わってほしい」と言われ、代わってあげたのです。6日に職場から建物疎開作業に行った人は3人。1人はやけどを負いながらもかろうじて夕方事務所に帰ってきましたが、1人は行方不明のまま、そして私が代わってあげた人は似島方面で遺体で見つかったそうです。当時、19歳の私は、事務所に入って1年も経っていなかったその人と特別親しかったわけではないので、最初はその事についてはあまり気にはしていませんでした。しかし、状況が落ち着いてから、その人のお母さんが子どもを背負って事務所にあいさつに来られ、「母親がこの子を残していなくなったので、今からどうしたらいいか分からないんです」と職員の前で言われてからは、「この子どもさんを今からおばあちゃんが育てられるのは大変だ。気の毒に」と代わってあげた自分を責める気持ちになったり、「自分が『代わってください』と言ったわけではないし、あの時、代わってあげなかったら、自分が死んでいたかもしれない」と思ったり、いろいろと複雑な思いに悩むことが度々でした。そのお母さんと子どもとはそれっきりで、事務所もこの2人に何か援助をしてあげるといふこともなかったと思います。

時が経てば経つほどこの事を思い悩み、今でも思い出しますが、「仕方なかったのだ」「あれは運命なのだから、自分の思い方を変えなければ」「私が代わってあげなくても、あの人が生きられたかどうかは分からない。しかし、代わってあげたから、私は、今、生きさせてもらっている。だから、与えられた自分の命を大事にしなければ」と自分に言い聞かせ、やっと受け入れられるよ

うになったのはつい最近のことです。

将来、^{みたび}三度、世界のどこかで核兵器が使用されるならば、広島や長崎の原爆被害どころではありません。だから、このような悲劇は二度と繰り返されてはなりません。とにかく戦争は絶対にしてはいけません。世界の至るところで戦争や紛争が日常のように起こっているけれど、あのような状態になってほしくはありません。未来がある子どもたちのためにも絶対に平和な状態を維持してほしいと心から願っています。

〈平成 25 年（2013 年）6 月 13 日聞き取り。年齢は聞き取り時の年齢〉



“あの日”を語り継ぐ

やはたむら
八幡村の8月6日

～小学生が体験した戦争～

こまつゆうじ
小松邑司さん（79）＝広島市佐伯区海老園

戦時中の思い出

私は、父が八幡国民学校の校長だったため、当時、八幡村保井田（現在の広島市佐伯区五日市町大字保井田）の学校の敷地内にあった校長住宅に、両親、2歳年上の姉と暮らしていました。

幼いころは物が豊富で、アメリカやフィリピンから輸入した干しブドウやバナナ、パイナップルなど食べたいものがたくさんありました。しかし、昭和16年（1941年）の真珠湾攻撃で太平洋戦争が始まるころから食糧事情が極端に悪くなり、昭和19年の終わりには学校の運動場はすべて芋畑に変わり、田舎でも麦、おかゆ、芋だんごを食べるようになりました。母が食べるものには随分苦労していたのを覚えています。

昭和20年、米軍による日本本土への空襲が本格化すると、八幡、石内、河内にはよく日本人の戦意喪失を目的とした「宣伝ビラ」が落ちてきました。宣伝ビラを拾った人は、それを所有することが禁じられており、チフス菌がついているからと言って、箸でつまんで警察へ持って行っていました。また、ビラと一緒に飴なども落ちてきましたが、これも「食べないように」と言われていました。

戦時中の八幡村は「軍の協力村」ということで有名で、他の村ではしていないような空爆に対する訓練、毒ガス攻撃に対する防毒訓練を実施したり、村全体での縄の供出などを強いられたりしました。我が家のような農家以外の家では、農家から藁わらを買い、1軒につき10巻きだったか15巻きだったかを子どもも一緒になって作りました。農家では、お米も供出しなければならなかったのではと思います。

また、年に3回程度、農繁期に軍が小学校の全施設を利用し、兵士の訓練をしていました。学校の敷地内に住んでいた私は学校の回りに張り巡らされた幕すきまの隙間から訓練の様子を垣間見ることができましたが、銃の打ち方の練習など

を行っていました。戦争末期には背中が曲がったような年齢の人も兵士として召集されていました。

昭和19年の冬の軍事訓練で、今思い出しても涙が出てくる気の毒な出来事がありました。兵士たちが背囊^{はいのう}を担いで近くの観音山^{かんのんやま}に登ったり降りたりする訓練がありましたが、ある兵士が銃の先に付ける手裏剣を途中で落としたのです。当時、軍の所有物をなくすということは重大なことで、手裏剣1本を団員全員が登ったコースと降りたコースに探しに行かされました。既に時は夜になっており手裏剣は到底見つかるとは思えません。結局、落とした兵士と所属する班員10人ぐらいが運動場に立たされましたが、立ったまま眠っているのが分かるくらいでした。当時の訓練は非情で愚かというか、成績がよい人は早く休めるのですが、成績が悪かったり、ミスをしたり、上官の意に沿わなかった場合は訓練終了後に運動場を10～15周走らされます。この時も、運動場を走らされた後、体力を消耗しているにもかかわらず、夕食抜きで、運動場に立たされていたのです。見かねた母がおにぎりを作り、私に持って行くように言いました。私がおにぎりを差し出すと、その兵士は涙をぼろぼろと流して「ありがとうございます」と一言、しかし、決して食べようとはされなかったのです。

8月6日

あのころの学校は夏休みがなく、1～3年生は学校で授業を受け、4～6年生は作業を行っていました。八幡国民学校には高井^{たかい}と保井田に2つの校有林があり、夏の時期には高学年の児童が冬に使う炭焼き用の木を採りに行きました。直径6センチメートル以上の木ばかりを切り落とす作業です。

8月6日は、午前零時過ぎに空襲警報があり、これで学校に行かなくてもよいと喜んだのですが、その後、警報解除になったので、朝早く学校に集合しました。

児童は二手に分かれ、私は利松^{としまつ}から高井經由^{やまだやま}で山田山に向けて出発しました。鈴^{すず}が峰^{みね}の峠を越えたころです。一番上までは登っていなかったと思うのですが、突然、B29のものすごい爆音がしたので、何だろうかと思ってみんなで広島方面を見ると、落下傘のようなものが落ち、飛行機が北西に向かって行くのが見えました。そして、飛行機が見えなくなると同時にピカッと雷の何千倍ともいえる閃光^{せんこう}が走ったのです。何が何だか分からず、当時、訓練されていた通りに目と耳を両手で押さえ、その場に伏せました。その時、強風でもなく微風でもない生ぬるいような爆風が流れてきました。

感覚として二、三分ぐらい経過したでしょうか。友達と恐る恐る立ち上^あがっ

て広島の空を見ると、余りにも大きな黒い雲が立ち上っていたのでびっくりしました。いわゆるきのご雲のような形ではありませんでした。雲が大きすぎて形が見えなかったのです。

引率の先生は、作業の中止を指示し、学校には戻らないで近所の者同士で帰宅させました。下山途中に黒い雨が降り出しました。ザーと降って、またザーと降るという感じでした。私たちは高井の上り口に生えていたハスの葉を傘代わりにして、中地なかじを通して家に辿り着いたのが午前11時ごろでした。

学校の敷地内にある家に戻ってみると、講堂の東側の窓ガラスが全部割れていました。その中で音楽の授業を受けていた児童がガラスの破片でけがをしていましたので、近所の横山医院で手当てあてを受けていました。我が家は天井が裂け、東側の窓ガラスが割れていましたが、家の前にあったY邸や横山医院や役場のガラスは壊れていませんでした。ガラスが割れた家と割れなかった家があり、爆風がどういうふうにしたのかとても不思議でした。爆心地から約9キロメートルも離れた八幡でも窓ガラスが割れるほどですから、原子爆弾の威力がいかに大きいものを物語っていると思います。また、正午ごろから午後4時ごろまで、昔、土壁つちかべの下地に使われていた1メートルぐらいの“竹小舞い”や建物の残骸、新聞紙の焦げたようなものがぼろぼろと降ってきました。そのころは、広島市方面は空が真っ暗になるぐらい噴煙が上がって太陽が見えないほどでした。

おそらく軍から学校の講堂を臨時救護所にするので受け入れの準備をするように指示があったのでしょう。私は母に言われて、近所の人たちと一緒に講堂内のガラスの破片などの片付けを手伝いました。掃除が済んだ午後1時半ごろから午後6時ごろまで、ひどくやけどした被災者が軍のトラックで石内方面から次々と運ばれてきて、ただただ驚くばかりでした。全身をやけどした人たちは、鼻と口と目だけ見えるようにして白い薬を塗りたくられているのです。衣服もぼろぼろ。ものも言えない、意識があるのかないのか分からないような人がどんどん運ばれ、講堂に敷かれたむしろの上に寝かされました。むしろに直に寝かされるのですから、やけどした人はとても痛かったと思います。痛いというよりは、もうそういう神経もなかったのかもしれない。講堂が被災者で隙間なく一杯になると、講堂での受け入れが打ち切られ、お寺など次の場所に運ばれていきました。私の家でも、学校の関係者や知り合いの人など8人ぐらいをほぼ2か月間お預かりしました。教室は遺体の安置所に使われました。

悲惨な光景

8月6日の夕方から被災者が次々と亡くなっていきました。八幡には保井田、寺田、高田と3か所に火葬場がありました。しかし、それぞれの場所ではせいぜい1日に2体、計6体ぐらしか火葬することができませんでしたので、火葬場以外の広いスペースで遺体を茶毘に付す光景も見受けられました。

普通であれば、遺体は棺ひつぎに入れられて、外から見えないように火葬されますが、当時は、火葬場だけでは間に合わないので、廃材などの板の上に遺体を載せて火葬したので、否が応でも見えてしまいます。人の遺体を焼く光景を見ることほどショッキングで辛いことはありません。魚を焼くのと同じです。まず、最初に内臓がポーンとってはじけるのです。一度、学友たちと見に行ったことがあります。地域の人が大勢、奉仕で遺体を茶毘に付していました。茶毘に付された後の遺骨は壺つぼに入れられ、一時、校長室に安置されている状態が続きました。

救護所に運ばれた被災者は、哀れというか、運び込まれた時よりも一、二日目ぐらいが大変でした。傷口に大きなウジが湧わき、それが傷口の膿うみを吸うためとても痛く、「取ってくれ、取ってくれ」と言うのです。母がそれを箸はしでバケツに取り、家に持って帰って焼いて処分していました。取っても、取ってもバケツがすぐに一杯になり、今、思えば本当によくやったなと思います。

話ができる被災者からは名前や住所など参考になる情報の聞き取りが行われました。自分の親戚しんせきや子どもを捜して次から次へと救護所を訪ねる人がたくさん来ていました。こうした光景を見るにつけ、本当に気の毒でした。夜中に知らない間に亡くなられるなど、多いときは教室に10人ぐらい安置されていたと思います。

私の親戚が広島市内の観音かんのんに住んでいたので、安否を確認するために原爆投下後2週間ぐらいして父と一緒に市内に行きました。己斐橋こいが落ちていたので、干潮の時に石を渡って川を越えました。市内は完全に焼け野原と化し、横川よこがわから出た電車も焼け焦げ、道路には牛や馬の死骸しがいの死臭でいっぱいでした。夜は辺り一面真っ暗で、ローソクを灯ともして過ごしましたが、馬などの死体からリンがあがり、至るところに青白い光が燃えていた光景は今でも忘れることができません。

終戦を迎えて

広島市に原爆が投下される前の7月28日、鈴が峰から八幡にかけて米軍のB24が5機ぐらい飛んできて、そのうちの1機が撃墜されたことがあります。

最初に尾翼が落ち、次に胴体が落ちました。後に役場に展示されていた墜落機の装備品には、ゴムボート、乾パン、水、海水を真水にする手回しの器具、魚釣りの道具など、一、二週間は生活できるようなものがぎっしり詰まっています。B24が墜落した時、皆が現場を見に行きましたが、私は機内の装備が余りにも進んでいるのを見て、小学生ながらこの差では連合軍に勝てるはずがない、日本はいずれ負けると思っていました。

終戦の知らせは、川に泳ぎに行っていた時、近所のラジオを聞いて知りました。無条件降伏するということで、皆ショックでしたが、大半は「よかった」と思っていたと思います。こんな哀れな戦争をするよりは、降伏して早く日本の再建を始めたほうが良いと思う人もいました。

昭和20年の夏休みが終わったころ、八幡国民学校が臨時救護所としての役目を終えました。最後まで収容されていた人たちの3分の1は親戚の人が連れて帰られ、3分の2は軍隊によって別の収容所に移されました。

昭和22年に新しい学校教育法が制定され、私は初めての新制中学1年生となりました。最初は、まだ校舎のない時期でしたので、小学校の講堂を仕切って教室にし、中学1年時を過ごしました。

8月6日に黒い雨に遭遇した私ですが、39歳の時に胃がんを、また、その後も大腸がんを患いましたが、それ以外は原爆による後遺症でひどく悩まされることはなく、現在までなんとか元気で過ごさせてもらっています。かつて福^{ふく}山^{やま}の歩兵第41連隊全員が玉^{ぎょく}砕^{さい}したフィリピンのレイテ島を訪れたり、広島ベトナム協会や地域のボランティア活動に参加したりしています。

平和への願い

戦後、被爆者は原爆による後遺症をはじめ、被爆による結婚差別や就職差別など言葉では言い尽くせないほど辛い思いをしてきました。戦争は絶対にあってははいけません。その上、原爆は絶対に造ってはいけません。

しかし、諸外国ではいまだに広島^{ひろしま}の原爆で何万人の人が犠牲になったのか、また、想像を超える原爆の威力について知らない人がほとんどだと思います。その上、日本でも戦争を経験していない世代が増え、原爆に対する認識が空洞化してきていると思います。

私は、今まで、原爆とか平和とかについては、できるだけ避けて通ってきました。しかし、平成23年(2011年)3月に福島^{ふくしま}の原子力発電所の事故が起り、原子力の平和利用の安全神話も崩れ去り、福島の人たちが誤った認識や差別を受け続けて苦しんでいます。だからこそ、唯一の被爆国国民として原

爆の悲惨さ、恐ろしさについて全世界にいろいろな情報を発信し、ありとあらゆることを地球上の人が知るように取り組んでいかなければならないのです。

〈平成 25 年（2013 年）8 月 5 日聞き取り。年齢は聞き取り時の年齢〉



“あの日”を語り継ぐ

あの日の五日市町

～爆心地から9 km 離れた町で～

H. T. さん（78）＝広島市佐伯区藤垂園

戦時中の思い出

昭和30年（1955年）に新しい佐伯郡五日市町（現在の広島市佐伯区）が誕生するまでの旧佐伯郡五日市町は、石内村、観音村、河内村、八幡村を除いた地域で成り立ち、辺り一面が田や畑でした。

私の家は宮島街道から約100メートル余り北に入ったところ（現在の五日市駅前一丁目辺り）にありました。父は、もともと指物大工でしたが、戦時中は軍需工場に指定されていた近所の工場に通っていましたので、最後まで軍に召集されることはありませんでした。また、父はいくらかの田を所有し、それに加え宮島街道の北側の一角の田畑を借りて米や野菜を作っていました。農作業は主に母が従事しました。

当時の思い出と言えば、何と言っても「食糧事情」に尽きます。我が家は田畑で米や野菜を作っていたため、食べる物が手に入らないということはありませんでした。しかし、親戚や知人が来訪してくると一緒に食事をしたり、米や野菜を分けてあげたりしていましたので、私たちも米などは大事にとっておき、平素は麦、かぼちゃ、芋を入れたご飯や薄いお粥を食べるなど他の人たちと変わらない質素な生活をしていました。

小学校二、三年生ごろ、友達が時々学校かばんに果物を入れてきて、みんなに分け与えていましたが、実は、どこかの畑で黙って取ってきたものだったということもありました。それほど、当時は食べ物や食べることは最大の関心事だったと思います。

当時の学校生活

戦時中は、小学校が国民学校と名前が変わっていました。旧佐伯郡五日市町には五日市国民学校1校があるのみで、私が1年生の時は男子組、女子組、男女組の3クラスでした。しかし、昭和20年になると戦争が段々激しくなり、広島市内から縁故を頼って引っ越してきた児童が増え4クラスとなりました。

戦時中は授業らしきものはあまりなく、かなりの時間を勤労奉仕に費やして

いたと思います。当時の運動場は一部畑と化し、一段下の広い敷地はすべて芋畑や野菜畑でした。炭焼き小屋もありました。畑は肥料が必要なため、私たちは学校から約6キロメートルの道のりの極楽寺山ごくらくじやまに落葉拾いに行かされました。背負えるように炭俵かづにひもをつけて、それを担いで山登りをしました。湿ったべたべたの落葉はとても重いため、炭俵の半分ぐらいを拾って、持ち帰り肥料にしていました。また、炭焼き用の木を集めるために皆賀みながの山に行き、1人1本ほどカシの木を切り、自分で縄をかけ長いまま引きずって帰りました。その場で短く切ってしまうと持ち運びが難しくなるからです。こうした作業は戦後もしばらく続きました。

8月6日に近づくにつれ、空襲警報で学校が休みになったり、早く帰宅したりしていました。学校の東側が現在の新宮苑しんぐうえん地域に当たりますが、その山腹に何本か防空壕ぼうくうごうが掘ってありました。しかし、実際に空襲があり防空壕ぼうくうごうに逃げ込んだという記憶はありません。

昭和20年7月28日に空襲警報が発令され、この日は家にいたので庭に作った防空壕ぼうくうごうに入りました。防空壕ぼうくうごうとは言っても、庭の植木の間に穴を掘り、木組みの屋根をつけ少し土を盛った気休め程度のものでした。一応そこに入り入口で空を見上げていると、数機のB24型の飛行機が飛んでいました。その中の1機に高射砲が命中し、火を噴き金属片が飛び散って、落下傘がいくつか開くのが見え、機体は煙を吐きながら鈴すずが峰みねの山の方へ墜落しました。近所の子どもたちと現場まで行こうとしましたが、実際には目指した地点よりさらに一山奥の方で、結局行くのをあきらめました。現場から戻った者の1人が「女が乗っていた。色の白い」と言っていました。しかし、それはおそらく肌の色が白かったからでしょう。パラシュートで脱出した乗組員は捕虜として広島市に連れて行かれ、1人を除いて原子爆弾で亡くなったということです。海老山かいろうやまの上にも高射砲があったと聞きましたが、江波山えばの陣地からののが命中したのだと言う人もいてよく分かりません。

また、時折、遠方で飛行機が墜落するのを見たことがあり、その時は皆手をたたいて喜びました。しかし、後から聞いてみるとそれは日本の飛行機だったということもありました。

当時は、日本が負けるとは全く思っていませんでした。大きくなったら入隊しなければいけないのだろうなどは思っていました。

8月6日

昭和20年、私は小学校4年生でした。8月6日は普通であれば夏休みの時

期です。しかし、理由ははっきり覚えていませんが、学校に行っていました。当時の学校は毎朝運動場で朝礼があり、月曜日は朝礼後、運動場を一周して教室に入るようになっていました。8月6日は月曜日にあたり、午前8時15分はちょうど朝礼を済ませて教室に向かって運動場を回っている途中でした。突然、ピカーッとものすごい閃光^{せんこう}が走りました。空襲警報は出ていなかったのもので、その瞬間は何が起こったのか分からず皆歩くのをやめ、不安そうに立ち止まっていました。当時は、何かあるとその場に伏せ、両手で耳と目を塞ぐ^{ふさ}ように訓練されていましたので、先生の「伏せ！」という声に皆その場に伏せました。「ドーン！」という腹に響くような大きな音とともに窓ガラスが壊れて飛び散りました。その近くに伏せた児童数人が割れたガラスの破片でけがをしました。当時は空襲時の飛散防止として窓ガラスにはすべて縦・横・対角線に紙が貼られていましたが、それはまったく役に立たず、爆風で東側の窓ガラスはすべて壊れました。爆心地からの距離を考えると、「ピカーツ」から「ドーン」までは20秒以上あったはずですが、よく覚えていません。伏せてからすぐに「あれは何だ」という声に顔を上げると、東側の山の上空を先端がくるくる回転しながら広がってくる黒い雲が見えました。これがいわゆるきのこ雲だったのです。学校のグラウンドからは山のかげでその全貌は見えませんでした。この黒い雲が広がってやがて黒い雨を降らせるのです。奥の八幡村辺りでは黒い雨が降りました。五日市町でも一部の地域では黒い雨が降ったという証言もありますが、現在、公式には認められていません。

その後、児童は講堂に集められました。先生から「広島市内が大変なことになる」と聞かされましたが、先生たちも何が起こったのか分からないようでした。昼前ごろに同じ方向の者同士で帰宅しました。

広島市内から避難してくる被災者の多くは、当時観光道路と呼ばれていた宮島街道を通して逃げて行きました。私の家は宮島街道から少し北に入ったところにあるので、普段から宮島街道を通ることがなく、この日もいつもの通学路を通して帰りました。しかし、それでも途中避難してくる人何人かに出会いました。衣服はぼろぼろで顔も服もすすけたように汚れて黒くなり、閃光^{せんこう}が当たった側がやけどして皮がずるとむけている人など様々でした。やけどした手の掌^{てのひら}を下向きにして胸元の前に突き出し避難して行くのです。こうしないと痛くて、痛くて我慢できなかつたのでしょう。ただただ気の毒なことでした。

近所同士で助け合って

原子爆弾により広島市内の鉄道が寸断され、列車が市内に入れなくなり五日

市駅でストップしました。当時は公民館のような公共の避難場所はなく、6日の夜から数日間だったと思いますが、その列車に乗っていた乗客を近所の家々が手分けして預かりました。我が家は夫婦2人を泊めたのを覚えています。

父の知り合いで近所の人の子息さんが帰ってこないで、その人と父と一緒に広島市内に捜しに行きました。いろいろ捜して、大やけどして倒れていた息子さんをようやく見つけて、どこで工面したのかリヤカーで連れて帰りました。息子さんは学徒動員でどこかの建物疎開作業に従事していたのかもしれませんが。この息子さん以外にも、父は近所の人を捜しに何度か入市しました。また、しばらくしてから己斐^{こい}駅の倒れた電車の車庫を起こす作業に駆り出され、何日間か己斐駅に通いました。

最後まで軍に召集されることなく生きる使命を与えられた父は、戦後は地域の発展のためにいろいろ活動しました。その父は80歳過ぎて2回ほどがんを患い、86歳で亡くなりました。

戦後の思い出

“鬼畜米英”と言ってあんなに嫌っていたのに、進駐軍を乗せた列車が五日市駅に停車すると、子どもたちが列車に群がったものです。”Give me chocolate.”というチョコレートやチューインガムをくれるのです。私も度々駅に遊びに行きました。

また、列車に乗った兵士たちが手招きするので、何かもらえるのかと思って子どもたちが走って行くと、兵士たちが楽しそうに大笑いするということもありました。^{てのひら}掌を下にして手を振る日本の手招きのジェスチャーは、欧米では「さようなら」を意味するのだということ、国により文化の違いがあることをこの時初めて知りました。

戦後間もない昭和20年、21年はまだまだ食糧がない時代でした。そんな中、五日市駅の倉庫には刻んで干した芋の袋詰めが積み上げてあり、子どもたちはそこへ行っては袋の中から芋を取って食べたり、見つかったら怒鳴られて逃げるなどは日常茶飯事に起こったものです。

平和への願い

この太平洋戦争では、死者・行方不明者が推定10万人と言われている3月10日の東京大空襲をはじめ、多くの大都市への空襲、地上戦での犠牲者数が20万人とも24万人とも言われる沖縄戦、昭和20年末までの死没者が14万人（±1万人）と言われる広島市への原爆投下、同じく昭和20年末までの

死没者が7万3千人と言われる長崎市への原爆投下と数多くの悲惨な出来事が起こりました。原子爆弾は、たった一発の爆弾で甚大かつ悲惨な被害をもたらしたこと、更には直接原爆に遭っていない人までも亡くなるなど、後々まで放射線による後遺症を患うということで特に非人道性が問われています。戦争や紛争はすべて同じです。

今、世界を見渡すと至る所で紛争や摩擦が絶えず起こっています。残念ながらこうしたことはなくならないのではないかと私は^{きぐ}危惧しています。友達付き合いでさえ、文字通り皆が仲良くすることは難しいものです。ましてや地域や文化が異なる世界では、摩擦は容易に起こってくるし、いろんな利害が絡んで争いが起こるのだと思います。

戦争や紛争、争い事がないことを維持することは非常に難しく、だからこそ平和であること、平和を維持することがいかに大切で難しいことかということが分かります。今の日本は世界の中でも平和な国であり、次代を担う若い人たちには知恵を出し合って、是非、この平和な状態を続けていってほしいと願っています。

〈平成25年（2013年）9月2日聞き取り。年齢は聞き取り時の年齢〉



“あの日”を語り継ぐ

原爆に家族を奪われて

～戦後を生き抜いた姉妹の絆～

たかはしみほこ
高橋美保子さん（75）＝広島市佐伯区旭園

被爆前の生活

昭和20年（1945年）当時、7歳で草津^{くさつ}国民学校の2年生だった私は、両親と3番目の姉（15歳）、次兄（12歳）、4番目の姉（10歳）、五女となる私の6人で爆心地から4.6キロメートル離れた広島市草津^{くさつ}南^{みな}町（現在の広島市西区）に住んでいました。長兄（25歳）はこの年の4月に戦死、長姉（23歳）は既に結婚し、次姉は親戚^{しんせき}の家に養女として出ておりました。

当時の草津地域は海産物の重要な集荷場として発展しており、50歳の父は半農半漁で生計を立て、船で魚を採りに行き、冬場にはカキを養殖しアサリやノリを採っていました。また、草津の山の畑で野菜や芋、柿やイチジクなどを栽培し、高井^{たかい}（現在の美鈴が丘^{みすずおか}）に田んぼを借りて稲も作っていました。幼かった私は父の大八車に乗せてもらって一緒に畑に行ったり、かご一杯に果物を入れて持って帰ったり、四季を通じて小魚、カニ、エビなどを食べさせてもらった記憶があります。そのため、昭和20年といっても食べるものにはさほど困ってはいなかったと思います。

8月6日

この日、母と4番目の姉と私の3人が家にいました。午前8時15分、私は家で遊んでいました。突然、大きな音がして2階の窓ガラスが割れ、1階の土間に置いてあったはしごが落ちる音で大泣きしたことを覚えています。草津地域でも割れた窓ガラスの破片でけがをした人が多かったようですが、我が家は3人ともけがはありませんでした。

父は国民義勇隊として、国民学校6年生だった次兄を連れて、町内の人たちと一緒に小網町^{こあみちょう}（現在の中区）に建物疎開作業に出ており、現場に到着して間もなく原子爆弾の犠牲になりました。草津地区には東町^{ひがしまち}、本町^{ほんまち}、南町^{ななまち}、浜町と4町がありましたが、6日がちょうど南町の当番日だったのです。当時は義勇

隊への参加は強制的で、参加しない場合は食糧の配給がなく、各家庭から主に働き盛りの人や若者が参加していました。この日も草津南町から157人が義勇隊として出動し、全員が原子爆弾の犠牲になったのです。

午前中には、広島市中心部に大きな爆弾が落ちたという知らせが町内に届きました。義勇隊として建物疎開作業に参加した人や学徒動員等で中心部に出かけた家族や親類を捜しに行くというので、母もすぐに父や次兄や姉を捜しに出かけました。爆心地から2.5キロメートルの己斐まで歩いてたどりつきましたが、それから先は橋が壊れていたり、火の手が上がっていたりでそれ以上中心部に近づくことができなかったと言っていました。また、市内に入ってはいけなと人から止められ、仕方なく2号線を引き返し帰ってきました。

3番目の姉は、霞町かすみちょう（現在の南区霞一丁目、爆心地から2.7キロメートル）にあった広島陸軍兵器補給廠ほきゅうしょうで被爆し、その後、近くの比治山の防空壕ひじやま ぼうくうごうに避難したそうです。自力で帰宅したかどうかはよく覚えていないのですが、多分、2日して帰ってきたと思います。後日、市内は火の海で通れなかったと言っていました。避難する途中、火の中を歩いたりしたのでしょうから、その後しばらくは体調も悪く、肝臓が悪くなったり、戦後は結構病院通いをしていました。

原爆で両親と次兄が逝く

次兄が8月6日の昼過ぎにトラックに乗せられて、消防団の人に連れられて帰ってきました。次兄は背中をやけどして皮がむけていました。被爆後、川に飛び込んでいたところ救助隊に助けられたようです。

父は、ほとんど全身大やけどでただれてぼろぼろの格好をして自力で歩いて帰ってきました。やけどで顔がパンパンに腫れあがり、誰なのか識別ができないような状態でした。こんな状態ですから、家に着くと寝たきりとなってしまう、「水、水。水をくれ」と大きな声で怒鳴っていました。しかし、やけどした人に水を飲ませてはいけなという知らせが既に町内にも回っていたので、筆に水を浸して唇に塗ってあげることはできませんでした。「こんなものではだめだ。バケツにいっぱい水を飲ませてくれ」と怒鳴る父の様子が怖くて私は家に入れず、ずっと外で遊んでいました。

やけどの薬や包帯もなく、なんら処置もできないまま、また、全身やけどをした体に掛け布団をかけることもできず、ただそのまま敷き布団に寝かせている状態でした。

次兄は父ほどのやけどではありませんでしたが、川に飛び込んだときに水を飲んだせいでしょうか、最初に次兄が翌日の8月7日に息を引き取りました。そして、次兄の死を嘆き悲しみながら後を追うように、翌日の8月8日に父が亡くなりました。

6日当日は己斐・高須^{たかす}方面では真っ黒い粘りつけのある驟雨^{しゅうう}が降ったと記録されています。あんなに元気だった母は、己斐まで歩いて行った時にその黒い雨にあたったのかもしれませんが。すぐに体調が悪くなり寝込んでしまい、父の49日の法要の日にあたる9月24日に他界しました。亡くなる10日ぐらい前から髪の毛が抜けたり、口から血を吐いたりしたので草津の病院に入院させましたが、1週間前からは私が「お母ちゃん、お母ちゃん」と呼んでも何も言えない状態となりました。

こうして、原子爆弾に次兄、父、母を次々と奪われ、我が家は昭和20年の1年で4月に亡くなった長兄を含め4人を亡くしてしまったのです。

姉妹だけで父と次兄を火葬に

臨時救護所となった草津国民学校には続々と被災者が手当てを求めて避難してきていました。次から次に亡くなっていく被災者の遺体が校庭にまで積まれていました。

草津地区には草津の山に火葬場がありましたが、あまりにも犠牲者が多く火葬が追いつかないため、そこにも犠牲者の遺体が山のように積まれ、暑い夏の時期なのでウジが湧いていました。

火葬場では父と次兄の遺体を火葬してもらえなかったのが、草津の山の我が家の畑の真ん中に穴を掘って木切れを集めてきて2人を火葬しました。遺体の下に木切れを敷いて火葬し始めたのですが、薪^{まき}の方が先に燃え尽きてしまったので、また木切れを拾ってきて遺体の上に積んで焼きました。結局、火葬し終わるのに3日ぐらいかかりました。山の上での火葬なので3日3晩そばにしていたわけではありません。しかし、遺体を棺^{ひつぎ}に入れて火葬することができないため、父と次兄の火葬風景は幼^{おきなごころ}心にもショックで、夜になると怖くて姉がいないと家に入れなほどでした。

この時、母は既に病床に伏せておりましたので、8月2日に出産し6日の原子爆弾で夫を亡くし家に帰ってきた長姉、3番目と4番目の姉と私と、姉妹だけの火葬でした。3日かけて父と次兄を火葬したことは今でも私の記憶に強く残っています。

しかし、こうした状況は我が家だけではありませんでした。6日に小網町に建物疎開作業に行った草津南町では我が家と同様に一家の働き盛りの家族を奪われた家が多く、毎日のように家族の死を悲しむ泣き声が聞こえ、亡きがらを送りだすのに大変な時期でした。

助け合いながら戦後を生き抜く

草津地区では爆風の被害により危険な状態になった家屋もありましたが、我が家はかろうじて残りました。生まれたばかりの娘を連れ帰った長女、三女、四女、五女と女ばかりがこの家で身を寄せ合って助け合いながら生きていくことになりました。

長女、三女の2人の姉が働きに出て、残された家族を食べさせてくれました。夜の引き潮の前、まだ海水が残っている時に合わせて網の袋を持ってアサリを採りに行き、冷たい海水に潜るもぐようにしてアサリを網一杯に採り、その網を水に浮かしながら持って帰り、夜のうちに貝を開いて身を取り出して、朝4時ごろ市場に売りに行く、それが済むと2人は会社や工場に働きに行くという生活でした。

四女と私の2人は長女の赤ん坊の面倒を見ながら、ご飯を炊いたり家事を担当しました。四女は長女の赤ん坊を背負って小学校で授業を受けたりしていたほどです。

長女にとっては家計のやりくりは大変だったと思います。草津の山の上にあった畑も長女が売却したのか、結局なくなりました。また、現在は商工センターになっていますが、そこを埋め立てる時にアサリやカキの漁業権を持っていた人には補償金が出ました。我が家も漁業権を持っていましたが、その権利を人に貸していて実際に営業をしていなかったため、補償金を受け取ることができませんでした。こうして、父が残してくれたものが一切なくなってしまったのです。働くと言っても男女で給与に差がある時代でしたし、女ばかりの家族で、男性と同様の仕事をする姉2人の収入のみでしたので、長い間困窮した生活を強いられました。私はまだ幼かったのですが、姉たちは大変苦勞したと思います。

私はもともと積極的な性格で運動神経もよく、中学校ではバレーボール部に所属し熱心に活動していました。先生にもよくしていただきましたし、級友たちも両親を亡くした私と仲良くしてくれていました。

私が中学校を卒業するころは、高等学校に進学する人が少しずつ増えていたころでした。四女が中学校卒業後すぐに製菓工場に働きに行きましたので、私の卒業時期が近づくと、長女が「学費を出してあげることができないので、働いてくれないか」と言いました。そのことに対し、先生は「積極性もあるし、勉強も頑張る子なので、もったいない」と言って、^{かんおん}観音高等学校の定時制の受験を勧めてくださいました。

しかし、試験に合格し入学はしたものの、月々600円の授業料に加え、自宅から己斐駅までの交通費が^{ねんしゅつ}捻出できない、己斐駅から高校までは徒歩で通うのですが雨の日は傘もないなど困難を極め、結局、2年半ぐらいで定時制高校を中退せざるを得ませんでした。

再婚しないで私たち妹を必死に支え続けてくれた長女は、長年の会社勤めの後、80歳まで会社の寮母をしながら働き続け、今年93歳という天寿を全うし永眠しました。四女は68歳の時に病気で亡くなりました。戦後の苦労を共にした姉たちが亡くなった時はさすがにいろいろな思いが去来しました。特に私の親代わりだった長女への思いは^{ひとしお}一人です。大変な苦労をしましたが、今、振り返ってみると助け合いながら生き抜いてきた姉妹の^{きずな}絆を通して、すべてが懐かしい思い出やよい体験だったと思えるようになりました。

平和への思い

理解ある優しい夫に支えられ幸せな結婚生活を送り、現在、3人の子どもや孫に恵まれ、趣味やスポーツで余暇を楽しみながら、家族の温かなぬくもりに感謝する日々を送っています。

当時、両親が生きていれば戦後にあれほど苦労を強いられることはなかったし、高等学校を卒業することができていたかもしれません。

これからの日本を担う若い人には戦争の体験や、私と同じような辛い思いや苦しみを経験してほしくありませんし、今の平和な時代が孫の時代にも続いてほしいと心から願っています。そのためにも戦争体験のない世代の人には是非戦争や原子爆弾の非人道性や悲惨さを可能な限り実感し平和な世の中を継続していく努力をし続けていただくよう祈っています。

〈平成25年(2013年)12月19日聞き取り。年齢は聞き取り時の年齢〉



“あの日”を語り継ぐ

私が忘れられないこと

そらかずお
空一雄さん（84）＝広島市佐伯区藤垂園

戦時中の思い出

昭和20年（1945年）、私は当時の佐伯郡五日市町皆賀さえきぐんいつ かいちちようみな がに両親や兄弟姉妹と住んでいました。二男で上から3番目にあたる私を含めて兄弟姉妹は8人ですが、長姉は既に結婚して呉市くれしに住んでいました。それでも計9人という大家族の中で暮らしていました。

父はこの地で米穀店を、長兄は我が家のすぐ近くで素麺そうめんの製造業を営んでいました。母は父の仕事を手伝うとともに7人の子育てに専念していました。

父は精米業を営む傍ら、田畑で米や野菜を作り、動物好きだったこともあり精米から出る飼料で豚や鶏なども飼っていましたが、芋の葉を煮たりお粥かゆに入れて食べるなどの食糧不足を経験することはありませんでした。よく乳飲み子を連れた母親が「食料が足りなくてお乳が出ないのです」と我が家を訪ねて来ていましたが、母が「持って帰りなさい」と言って内緒でお米などを分けてあげていたのを覚えています。

当時、現在の造幣局広島支局の辺りが競馬場だったこともあり、我が家では競馬用の馬や荷車用の馬を4頭ぐらい飼っていました。現在の広島市民球場跡地には西練兵場がありましたが、そこに我が家のように馬を所有する人たちが集められたことがあります。集めた馬を軍が品定めし、軍で使えると判断した馬はその場で半強制的に供出させられたことがあります。飼い主の意思にかかわらず、競馬用の馬は将校用に、馬車用の馬は荷物運搬用として没収されたのです。我が家の場合、競馬用の馬が1頭没収されました。

8月6日

8月6日は私が通う山陽中学校さんようのほとんどの生徒は学徒動員で広島市内を中心に工場や建物疎開作業に出かけました。工場や建物疎開に出かけた生徒は原子爆弾に命を奪われたり、大けがをしたりした生徒がたくさんいました。しかし、私は8月6日の二、三日前から風邪を引き、体調が悪くこの日は学校を休んでいたのです。

朝方、警戒警報が鳴り、米軍機が1機飛来した時、私は「とうとう来たな」と思いました。

我が家は八幡川^{やはたがわ}の近くにあり、川土手に電柱が立っていましたが、午前8時15分、その電柱がぱっとショートしたので、爆撃機が来たのかと思い外へ飛び出て見ました。それから工場に戻ろうとした時です。「ドカーン」と轟音^{ごうおん}が鳴り響き、爆風^{せんこう}、閃光が走り、工場が停電したのです。

東側から襲った爆風は工場の片屋根の傾きで威力が緩和されたのでしょうか、工場も、工場の西側にあった母屋^{おもや}も壊れることはありませんでした。しかし、近所の家では窓ガラスが割れたりしたところもあったと思います。

何が起こったのか理解できないでいると、広島市中心部から悲惨な状態の人たちが2号線に沿ってどンドンやって来ました。ひどくやけどをして全身がただれている人、顔^{すず}が煤けて衣服もぼろぼろになった人たちがよろよろと歩いて来るのです。よろよろと歩いてはいるのですが、一旦^{いったん}、よろけて電柱などのものに当たるとその場に倒れこみ、起き上がれないまま事^{こと}切れてしまうという状態でした。

みんなで「おかしいね。何が起きたのだろうね」と話し合っていると、空が真っ黒になり雨が降り始めました。土砂降り^{どしゃぶ}というのではなくパラパラと降る感じでしたが、その後、川上から真っ黒い泥んこ水が流れてきました。水面を見ると、おびただしいハゼ、ドンコ、ウナギなどが浮いて流れてきました。近所のみんで「なんかおかしい爆弾だ」と言い合っている間にも、やけどした被災者が次から次に逃げてきて、海老山^{かいろうやま}や更に西に避難して行きました。

とおかいち^{とおかいち}に住んでいた親戚^{しんせき}の男の子が我が家に避難してきたのが8月6日の夕方か翌日だったと思います。顔や首や手など衣服から出た部分をやけどしており、最初は誰^{だれ}だか分かりませんでした。名前を言われてようやく十日市の親戚の男の子だと分かりました。やけどがひどいので、母が我が家で看病することになりました。避難してきてから3日ぐらい経つと、やけどの傷口にハエが卵を産みウジ^わが湧くので、母^{はし}が箸で取っていました。また、当時は風邪薬や胃薬などの置き薬はあってもやけどにつける薬はありませんでしたので、母が卵の白身を取り除いた黄身をやけどの傷口に塗っていました。黄身を塗るとハエが止まらないし、ウジが湧きにくくなるのです。母は祖母から伝え聞いたのでしょうか、昔の人の智慧には驚かされます。この治療が功を奏したのか、その男の子は回復し現在も元気で暮らしています。

一発で広島市を廃墟と化した新型爆弾が落ちたということを知ったのは、十

日市の親戚の男の子の話を聞いてからです。

馬を連れて市内中心部へ

長姉が住んでいる呉市には軍港、呉海軍工廠^{かいぐんこうしょう}、海軍工作庁など海軍の関連施設がたくさんありました。こうした施設や市街地が7月に入り1日、24日、28日と立て続けに爆撃を受け相当に被害が出ていたので、連絡のない長姉の安否が心配になり、私が荷馬車を引いて呉まで迎えに行くことになりました。出かけたのは8月9日か10日の午前だったと思います。我が家の馬は日中は近くの八幡川に放していましたが、夕方になるとひとりで家に戻ってくるほど賢く、一番よく懐いていた馬を連れて行きました。

己斐^{こい}の旧国道を^{こい}通^{こい}って己斐駅まで出^{こい}て、己斐橋電車専用橋（=現在の新己斐橋）を渡^{こい}り、土橋^{どばし}、十日市^{あひおいばし}を^{こい}経^{こい}て相生橋の手前まで進^{こい}むことができました。十日市^{あひおいばし}辺りでは親戚の男の子の家があ^{あひおいばし}ったはずの場所を探^{あひおいばし}しました。途中、家々などの建物はほとんどが灰や瓦礫と化^{あひおいばし}し、“焼け野原”とな^{あひおいばし}っていましたが、土橋から十日市^{あひおいばし}辺りまでの線路上にはまだ合計3両ほど電車の車両があ^{あひおいばし}ちこちでくすぶ^{あひおいばし}っていたのです。そして、その中では焼け死^{あひおいばし}んだ人がまだぶつぶつと燃^{あひおいばし}えているのでした。倒^{あひおいばし}れて亡^{あひおいばし}くなっている被災者はまだ多少い^{あひおいばし}ましたし、相生橋がか^{あひおいばし}かる川や川土手にも何人か^{あひおいばし}いました。そうした光景の中^{あひおいばし}で辺りに漂^{あひおいばし}う臭^{あひおいばし}いを察知^{あひおいばし}してか、連れてきた馬が相生橋の手前^{あひおいばし}でどうしても動^{あひおいばし}こうとしな^{あひおいばし}くなりました。馬という動物は概^{あひおいばし}して賢^{あひおいばし}く、またげ^{あひおいばし}ることはあ^{あひおいばし}っても絶対^{あひおいばし}に人^{あひおいばし}を踏^{あひおいばし}みつ^{あひおいばし}けることをし^{あひおいばし}ない動物^{あひおいばし}です。私が前^{あひおいばし}に行^{あひおいばし}こうと引^{あひおいばし}いても、馬が嫌^{あひおいばし}がり地^{あひおいばし}団^{あひおいばし}太^{あひおいばし}を踏^{あひおいばし}んで頑^{あひおいばし}として進^{あひおいばし}もうとし^{あひおいばし}ないのです。仕方^{あひおいばし}なく、先^{あひおいばし}に進^{あひおいばし}むことを諦^{あひおいばし}めて引き返^{あひおいばし}さざるを得^{あひおいばし}ませんでした。

その後

その後、私も私の家族も広島市内には行きませんでした。父は、原爆による悲惨な光景を目にするのは辛いと言って広島市内には行^{あひおいばし}こうとはし^{あひおいばし}ませんでした。

広島市内から避難してきた被災者でこの地域で息を引^{あひおいばし}き取^{あひおいばし}っていった人^{あひおいばし}たちは、火葬場だけでは追^{あひおいばし}いつか^{あひおいばし}ないため、海老山などで地域の人^{あひおいばし}たちが協^{あひおいばし}力^{あひおいばし}し合^{あひおいばし}って茶^{あひおいばし}毘^{あひおいばし}に付^{あひおいばし}していき^{あひおいばし}ました。余^{あひおいばし}りにも多^{あひおいばし}くの遺^{あひおいばし}体^{あひおいばし}のため十分^{あひおいばし}な薪^{あひおいばし}が手^{あひおいばし}に入^{あひおいばし}らず、穴^{あひおいばし}を掘^{あひおいばし}って重^{あひおいばし}油^{あひおいばし}をか^{あひおいばし}けて火^{あひおいばし}葬^{あひおいばし}していき^{あひおいばし}ました。

一度、市内に入^{あひおいばし}った私^{あひおいばし}ですが、幸^{あひおいばし}いにも健^{あひおいばし}康^{あひおいばし}に恵^{あひおいばし}まれ今^{あひおいばし}日^{あひおいばし}に至^{あひおいばし}っています。恐^{あひおいばし}らく、食^{あひおいばし}事^{あひおいばし}の仕^{あひおいばし}方^{あひおいばし}や日^{あひおいばし}常^{あひおいばし}の生^{あひおいばし}活^{あひおいばし}の仕^{あひおいばし}方^{あひおいばし}がよ^{あひおいばし}か^{あひおいばし}ったのではな^{あひおいばし}いかと思^{あひおいばし}いますが、

健康には今も気を配った日々を送っています。

戦争は自分が信奉するものを他にも強いたりすることが原因で始まると思っています。ですから、特に次代を担う若い人には、自分の思いを一方向的に主張するのではなく、まず人のために尽くすことを心がけた生き方をしてもらいたいと願っています。

〈平成 26 年（2014 年）1 月 10 日聞き取り。年齢は聞き取り時の年齢〉

あの日”を語り継ぐ

私の8月6日 ～今もはっきりと覚えている光景～

よしだのりこ
吉田宣子さん（76）＝広島市佐伯区旭園

幼いころの思い出

私の父は、広島高等師範学校卒業後の日本での仕事が決まっていたのですが、学校からの推薦で満州国^{かんり}官吏の養成を行う「大同学院」^{だいどう}で研修を受けるため、当時の満州国の首都・新京^{しんきょう}（現在の長春^{ちょうしゅん}）に渡りました。単身で新京に渡ったのが、昭和10年（1935年）23歳の時だったと聞いています。渡航前に結婚した母もその後新京に渡り、私は新京で、すぐ下の弟は牡丹江^{ぼたんこう}で生まれました。私は父の仕事の内容を詳しくは理解していませんでしたが、大同学院修了後、「建国大学」の設立に携わる業務に従事したのをはじめ、いろいろ転勤もあったようです。

領土も狭く、天然資源も少ない日本が他国の土地に「いい国」「新しい国」を作ると言って満蒙^{まんもう}開拓移民団など大勢を送り込むとともに、その土地の人を働かせたりしたため摩擦が生じるのは当然のことと思います。時折、父が「匪賊^{ひぞく}が来てからの・・・」と言っていたのをおぼろげながら覚えています。

しかし、家の敷地内はいたって平穏だったように思います。敷地には、家の裏の畑にリンゴの木があり、我が家の他に若い中国人夫婦が別の家に住んでいました。家には冬の厳しい寒さを防ぐために「オンドル」があり、二重窓がありました。私はそこの一、二歳年上の子どもと一緒に仲良く遊んでいたことを記憶しています。

大同学院：満州国所管の国立学校で、同国官吏の養成・再教育のために設立。

建国大学：「学問の^{うんお}蘊奥（＝極意^{きょい}）を究め、身をもってこれを実践し、道義世界建設の先覚的指導者たる人材を育成する」ことを建学目的とし昭和13年（1938年）

5月に開学、1945年8月満州国崩壊に伴い閉学

匪 賊：徒党を組んで^{りやくだつ}略奪、殺人などを行う盗賊

父は満州国赴任後七、八年目に東京に異動になり、家族4人はそろって東京に転居しました。東京では短い期間、幼稚園に通っていましたが、空襲などで危険になったため、3番目の弟が昭和19年（1944年）7月に生まれる前の春に急きょ母方の実家がある広島^{さえきぐん}の佐伯郡八幡村^{やはたむら}に疎開することになりま

した。父は仕事の関係で東京に残りました。

祖父は八幡村で農業を営み、主に米や麦を作っていました。家の周りがすべて田畑で、ポツンポツンと農家が建っているという風景でした。野菜を作ったり、サツマイモなども植えたりしていましたが、お腹が減ってたまらなかったという記憶はありません。

田舎の生活はのんびりしており、上級生が道端の草を指して「これを採りんさい。これで飴が^{あめ}できるんよ」とか、また、家の周りに生えているゲンノショウコを指して「これは薬草だから踏んだらだめよ」などと教えてくれました。

昭和20年7月28日に米軍の飛行機タロア号が撃墜された時は、墜落する状況を祖父の家で見ました。祖父が「あっ、落ちる、あそこの山に落ちる」と青い空を指さして言っていました。その後、どのくらい時間が経過したのか覚えていませんが、「捕虜がくるぞ」ということで近所の子どもたちと一緒に見に行きました。捕虜になった米国人数人が五日市駅方面に歩いて連れて行かれる様子を覚えています。

8月6日

昭和20年8月6日の午前8時15分、私たち八幡国民学校1・2年生は当時御真影ごしんえいと言って奉たてまつっていた天皇の写真を収めた講堂で音楽の授業を受けていました。音がしたような、震えたような気がしたのですが、ピカーと光ったかどうかはよく覚えていません。多くの人のお話では講堂の東側の窓ガラスが割れたとありますが、そのことすら記憶にありません。

女の先生が大声で「座りなさい！」と叫びました。その後、先生が先頭になって「こっち、こっち！ちゃんと前の人についてくるんよ！」と叫ぶので、必死に先生について校舎の中を通り抜け、水飲み場を通り、講堂の西側にある相撲場すもうの後ろの山の防空壕ぼうくうごうに皆で逃げ込みました。ようやく我に返って周りを見回すと白いシャツや服が血に染まった児童がいるのに気がつきました。ガラスの破片でけがをしていたのです。私は幸いにもどこもけがをしていませんでしたが、その時、はじめて大きな恐怖に襲われました。

昼ごろまで学校に待機して、その後、高井たかい、中地なかじ、利松としまつ、保井田ほいでだなどの部落や近所の子ども同士が集まって、いつもの道を通って家に帰りました。

今もはっきり覚えている光景

家は壊れていなかったと思います。祖父や、所要でたまたま東京から広島に

来ていた父、そして、母や弟たちにもけがはありませんでした。

広島市内に入った近所の人から「広島はすごいことになっている。大けがをしている人もいる」と聞き、初めて8月6日の惨状を知りました。

父の実家が己斐にありましたが、そこの人たちも幸いにもけがはありませんでした。

その後、父は学生だった父の従妹を捜すため何日も広島市内に通いました。そしてようやく水主町^{かこまち}辺りで見つけましたが、辺りには乗せるものが何もなかったのので、抱えて帰ってきました。父が従妹を家の縁側にドサッと下ろしたのを今でも鮮明に覚えています。父の従妹は、あたかも丸いものが真っ黒焦げになってしまっているようでした。

母は、「婦人会」からの指示で、6日以降、救護所になった八幡国民学校に何日も何日も救護の手伝いに通いました。

その後

終戦とともに満州国は崩壊しました。父は仕事を失い、祖父の営む農業を継ぎました。もともと体が大きく体力を要する仕事は厭^{いと}わなかったのですが、作物を育てるコツは難しく、上手く育てることができず苦労したようです。また、何度も広島市内に入った父ですが、原爆の後遺症もなく94歳まで生きました。

戦後間もないころは、親戚や知人が身を寄せ合い、助け合いながら生きていました。どこかにつながりがあれば、家の一部を貸したり、借りたりと助け合いながら生きていった時代でした。我家でも原爆で被災した人に2階を貸していた時期がありました。

また、戦後の学制改革の狭間で、私が1年生から2年生に進級するとき、新しい教科書がなかったため、近所の人たちと話し合っ、親戚や知り合いの子どもたちが使っていた教科書を譲り受けて使いました。私は父の兄の2年生の子が使っていた教科書を譲り受けました。黒で抹消した箇所がたくさんある教科書でした。

平和な世界を願って

満州国に住んでいたころ、母は、中国人が多いところでは華道を教えたり、朝鮮人が多いところでは料理を習ったりし、互いに言葉を教え合ったりしていました。

また、家の門を出ると右手に街や市場があったのですが、ある日、私が一人

で門を出て市場の方に行ったことがあります。その時、誰かが私をぎゅっとなでかんで家まで連れて帰ってくれました。私が黙って家を出たため、母がとても心配していましたが、連れ帰ってくれた人は私があそこの子だということを知っていたのかもしれませんが、もし、あのとき連れて帰ってくれていなかったら、私は迷子になっていたでしょう。

人は国境を越えてもお互いに助け合いながら仲良く生きていけるのです。それが一度紛争や戦争になると、人としての絆が引き裂かれてしまいます。

それに、どの人も一人ひとり尊い命を与えられて生まれてきています。だから紛争や戦争でいとも簡単に奪われるのではなく、精一杯生きていける世の中になってほしいと心から願ってやみません。

〈平成 26 年（2014 年）7 月 17 日聞き取り。年齢は聞き取り時の年齢〉



“あの日”を語り継ぐ

運命の8月6日

ふじもとひろみ
藤本廣海さん（72）＝広島市佐伯区新宮苑

広島市に原子爆弾が投下され、14万人前後の方が犠牲になった昭和20年（1945年）8月6日、私はまだ3歳でしたので、8月6日の記憶はまったく残っていません。これからお話しすることは私の父や家族から聞いた話をまとめたものです。

私の父

私の家族は父母、1歳上の姉、生まれたばかりの弟の4人家族で、佐伯郡宮島町（現在の廿日市市宮島町）の棧橋近くの存光寺辺りに住んでいました。父は、ろくろ細工を家業としていましたが、昭和20年は宮島の対岸の大野の造船所に勤めていました。

ろくろ細工：木材をろくろで回転させながらカンナで挽いて椀、鉢、盆などを削り出す
伝統技術

父は子どものころ海で友達と遊んでいたときに事故で右目の視力を失っていました。このため徴兵検査に不合格となり兵役には就いていませんでした。とても子煩悩で、寄り合いの弁当に箸をつけず子どものために持ち帰るほどでした。戦後はろくろを再開して朝早くから夜遅くまで実によく働いてくれました。

8月6日

昭和20年8月6日、この日父は広島市内の歯医者に行く予定だったため朝の7時ごろ宮島の棧橋に出かけて行きました。しかし、棧橋に着くと、棧橋近くの浜にイカが打ち上げられているのを見て、それを一旦家に持ち帰ることにしました。持ち帰った後、今日は止めにして明日にしようとする予定を変更し、船から降りて20分程度のところにある勤務先の水野造船所に行きました。甲板の上で作業をしていたときです。突然「ドーン」という大きな音がして胸を突き飛ばすようなショックを受けました。大野からは閃光は見えませんでした。空を見ると雲がいつせいに固まって西の方向にドーと流れていきました。

歯医者に行くために乗ろうと思っていた船には肉屋のSさんが乗っていました。時間的に8時15分の原子爆弾に遭って亡くなられたと思われます。もしあの時、そのまま同じ船に乗っていたら、父も市内で原爆に遭っていたことでしょう。

8時15分、存光寺の近くの家の建てつけが悪くて引いても押しても動かなかった雨戸がひとりでにコトコトと動いて開いたり、天窓のガラスが落ちたと聞いています。

存光寺には被災者が運び込まれ、母、祖母も含め町民が看護しました。看病と言っても十分なことができるわけではなく、赤チンを塗ったり、耳や鼻など体の傷から湧いて出てくるウジを取るぐらいのことしかできなかったのではないのでしょうか。

父は、翌7日から10日間ほど市内の大芝に住む父の妹を捜しに祖父と一緒に広島市内に入りました。「市内には、焼けただれ、馬のように膨れ上がって亡くなった人がごろごろ転がっていた」とよく聞きました。叔母さんは安古市で収容されており、祖父と二人で宮島に連れて帰りました。顔に少し傷がある程度でやけどしているようには見えませんでした。下着姿で呆けたように縁側に掛けているのを不思議に思っていたと後に従姉妹が言っていました。おそらく10日間、放射能を含む雨水などを飲んで過ごしたのでしょう。その後、何日かして亡くなったと聞いています。

父は、その後、鼻血を出して一か月かそこら寝込みましたが、80歳の後半までは大病を患うことなく96歳まで存命しました。

戦争は、不幸な人をたくさんつくります。二度と悲惨な戦争が起こらないことを心から願っています。

〈平成26年（2014年）11月14日聞き取り。年齢は聞き取り時の年齢〉



“あの日”を語り継ぐ

私の8月6日

ひらたとしあき
平田利昭さん（76）＝広島市佐伯区八幡

当時の生活

私の家族は、父母、兄、姉、私、弟、そして妹の7人で、佐伯郡八幡村中地さへきぐんや はたむらなかちというところに住んでいました。父は昭和16年か17年に軍に入隊しましたので、8月6日当時は6人家族でした。戦後復員した父は戦地でのことは一切語りませんでした。しかし、酒の席などで父から南方のビルマ、ラングーン、ボルネオ、マレー、シンガポールなどの地名を何度か耳にしたことがあります。

母は、父が不在の間、農業に従事していました。納屋が比較的広かったので近所の人と一緒に縄やむしろを編んだり、山に木を採りに行ったりしていました。

食べるものがない時期で肉や魚はほとんど口にすることはなく、大根や薩摩芋のような野菜類を食べていたことを憶えています。米のご飯は食べた記憶がなく、もっぱらかぼちゃや芋の入った大麦のご飯でした。また、時折母が近所の人と一緒に山に木の葉を取りに行き、それをご飯の中に足したりしていたことの記憶があります。通常はおやつを食べることは考えられず、上級生と一緒に柿やグイミを取りに行きは食べていました。

8月6日

八幡国民学校1年生だった私の8月6日は8時15分の記憶のみが鮮明に残っています。当時2学年以上はそれぞれ2学級ずつありましたが、1学年だけ全体の人数が少なく1学級でした。人数は45人ぐらいいました。

8月と言っても夏休みはなく、1年生は学校で授業を受けていました。当時1、2年生は授業を受け、上級生は授業がなく高井たかい地域の芋畑の草取りをしていました。

8時15分、あたりが異様に光り、先生が「あれっ」と言いました。光っただけだったので次にとっさに何をするということもなく、「どうしたんかね」と見合っていました。ドーンという音がしたかどうかは定かではありません。爆風があつて先生は危険を感じたのか、すぐに「下に伏せなさい！」と言いまし

た。それでいつも訓練されているように両手で目耳鼻を押さえて机の下に隠れました。爆風が過ぎた後は何事も起こりませんでした。先生の「皆、防空壕^{ぼうくうごう}に行きなさい！」という指示で、私たちは10メートル以上ある学校の防空壕に避難しました。電気のない真っ暗な防空壕に30分か60分ぐらいいたでしょうか。その後、「家に帰りなさい」という先生の指示で、各自家に帰りました。

私たち1年生にはけがはありませんでしたが、窓が東側に向いた講堂で音楽の授業を受けていた2年生は、爆風で割れたガラスの破片でけがをしました。

家に帰ってみると、家族は全員無事でしたが、天井が吹き上がり、障子^{しょうじ}や襖^{ふすま}のさんが折れるなどの被害がありました。当時の家は東側に障子や襖があり、西側に壁のある台所や納戸^{なんど}がある造りが多かったためか、爆風が開け放たれた障子や襖の部分を通り越し、壁でせき止められ、天井を吹き上げたのだと思います。また、昼ごはんとして用意していたお粥^{かゆ}か何かが入っていた鍋がひっくり返って中味がこぼれていたことを鮮明に覚えています。

お昼前後だったと思います。私は150メートルぐらい離れた八幡神社に弟と遊びに行きましたが、その時、黒い雨が降りました。30分ぐらい雨宿りをするほどの夕立のようでした。着ていたシャツが黒くなったほどです。こうした黒い雨には放射能が含まれていると知ったのはずっと後のことでした。

6日の夕方ごろ八幡国民学校が救護所になり、母も近所の人たちと交代で被災者の看護にあたりました。この時に初めて「広島が大変なことになっている」という情報が私たちに入ったと思います。

亡くなる人がどんどん増え、地域の焼き場が間に合わないため、あちらこちらで茶毘^{たび}に付されたと聞いています。

それからしばらくして、己斐にいた父の兄弟の親戚にあたる女性が一人で我が家に避難してきました。母が看護していましたが、やけどによる化膿^{かのう}で、ハエが増え、部屋には異様な臭いが漂^{ただよ}っていました。看護するといっても、ウジを除去することしかできなかったのではないのでしょうか。その後、この女性は亡くなったと思います。

平和を願って

今の日本は平和だと思います。しかし、依然として民族間の紛争があちらこちらで起こっています。また、中国、韓国、北朝鮮と日本との外交関係がぎく

しゃくしている昨今、万が一にも戦争ということになればよいかと懸念しています。日本はもとより、かの国々でも、子どもたちには正しい情報を教え、お互いの人権を尊重し、和をもって尊ぶ教育をしっかりと行ってほしいと願っています。

〈平成 26 年（2014 年）11 月 19 日聞き取り。年齢は聞き取り時の年齢〉

タイトル “あの日”を語り継ぐ
版 次 初版
発行日 平成27年(2015年)3月1日
編集及び発行 公益財団法人広島市文化財団
広島市吉見園公民館
住 所 〒731-5132 広島市佐伯区吉見園13-1
TEL/FAX (082)923-3880
E-mail yoshimien-k@cf.city.hiroshima.jp

©2015 公益財団法人広島市文化財団 広島市吉見園公民館
本書の内容を無断で複製、複写、転載、転用、放送、データ配信などを行うことは固くお断りしております